

ヒッキー・シュガー・シン ドROOM

hanetaba

どさり。と、何かが落ちる音で目が覚めました。

目の前ではパソコンの画面が煌々と光っています。

思い眼をこすりながら。気だるい体を起こして、物音の在り所をたしかめようと、私は立ち上がりました。

うっすらオレンジ色の電球に照らされた室内を見渡しても。特に何か荷物が崩れた形跡はありません。

疑問符を浮かべ、部屋の真ん中で立ち尽くしていると。再び先ほどの音が聞こえました。

どさり。

再び、あの音が聞えます。

窓の外からです。

ゆっくりと窓に歩みより。完全に外の光を遮れるようにと、分厚い生地のものを選んだカーテンを、ほんの数センチだけずらし、外の様子を伺いました。

「ああ、そういう事ですか……」

合点がいき、思わず呟いてしまいます。

外はすっかり朝の光に照らされ。朝日を反射した、眩いばかりの白銀の世界が一面に広がっていました。

今日は一段と冷え込むと思っていたら、昨夜のうちに雪が降っていたようです。

わかってしまえば、何という事はない。庭の木に降り積もった雪が、重力に負け。地面に落ちる音だったのです。

雪に反射しいつもよりも数段眩い朝日は、私の目には刺激が強すぎます。

なんだか瞳が痛くなってきたので、すぐに私はカーテンを閉じました。

もう一眠りしようと、床に敷きっぱなしになっている布団のもとに戻ります。横になり、床に置きっぱなしになっているパソコンの画面を確認しました。

昨日は私の持つサーバーをホストにして、延々地下チャットに勤しんでいました。

様々な人が集まり談笑に花を咲かせていましたが、殆んどの人が退室し。今は二人ほど残った人が何やら語りあっているだけです。

声優の芹沢繭歌がどうのこうの。とかなんとか、熱い議論をかわしています。

私も知っている声優さんでしたが。最近の作品はノーチェックだったので。あえて会話に参加せず部屋だけそのまま残す事にしました。

私はルームマスターなので、知らない間に眠っていた事を説明し。会話に参加しても良いのですが、なんだかまだ眠り足りないので、お昼頃までこのまま放置する事を決め、私は再び眠りの大流に身を任せる事にします。

ふう……極楽。とは、こういった事を言うのでしょうか。

冷え切った寒い朝に、布団の中で惰眠を貪る。

これはまさに、地上楽土と言うに相応しい状態です。

ど、ど、ど、ど。

桃色の景色が私の目の前に広がり出した頃。

やけに勢いのある音が近づいてくるのがわかりました。

ああ、もうそんな時間なのですね。

面倒事がやってきました。

こんな事なら、もっと早く眠りにつけばよかった。あと二分あれば、すっかり熟睡の域に達せたのに。

「おい。蒔名、さっさと起きろ。今日こそは学校に連れていくからな」

部屋のドアを勢い良く開いたかと思うと。いきなり乱暴な声がぶつけられます。

私はきつく瞳を閉じ。寝たふりを貫く事に決めました。

嵐よ、早く去れ。

心の中で念仏のように唱えながら。この暴風が諦めて帰ってくれる事だけを願いました。

「あのな、お前が起きてるのはわかってんだぞ。そんな演技で俺の目がごまかせるとでも思ってるのか？」

きつく目を瞑り。私は自分に言い聞かせます。

私は眠っているのです。深く、深く。深海に住む貝のように私は今眠りの中にいるのです。

「はぁ。どうやっても起きるつもりはないんだな？いいんだな？お前がその気なら、こっちだって手段は選ばないからな？」

何やら物騒な事を言った後。暴風は事もあろうか私の布団を勢い良く引き剥がしたのです。

「ひゃあっ」

自分は深海の貝だと言い聞かせ。深く眠ったふりを決めこんだはずなのに、私は情けない声をあげてしまいました。

けれど、それも仕方ありません。

布団を引き剥がされ、まるでツンドラのような極寒の冷風が私の全身を激しく打ち付けたのですから。

昨日の夜から、私の体温で暖められていたぬくぬくとした布団から一変。無情な冷気を叩きつけられたのでは。その温度差に敵うはずがありませんでした。

「なんだよ。やっぱり起きてるんじゃないか。俺に寝た振りかますなんざ10年はええよ」

なんとも野蛮で乱暴な口調です。まるでヤクザ屋さんです。

「きょ、今日は何用でしょうか？和也君」

「何用じゃねーよ。俺が何しにきたのかは蒔名が一番知ってるだろうが」

「きょ、恐縮です」

なんとかうやむやにできないかと。私はすっとぼけた声で聞いてみますが。さすがは私と10年来の付き合いがある和也君です。

まったくこちらのペースに乗ってくれません。むしろ、怒られてしまいました。

「二年になって、一回も学校出てないだろ。今日こそは引きずってでも連れていくからな」

「い、一回は出ましたよ」

「始業式だけな」

鬼のような形相で私の手を掴み、無理矢理立ち上がらせようとする和也君。

私は敷布団にしがみつき、必死に抵抗を試みます。

「ほら、立て！行くぞ」

「行きません」

「行くっつってんだろ」

「ぜえったいに行きません」

私は爪が食い込むのも構わず。布団にしがみつき、運動不足で弱りに弱った体力を振り絞り、最後の抵抗を試みます。

「往生際わりーぞ蒔名」

「んぐぐぐ」

さすがに私がどんなに抵抗しても、男の子である和也君の腕力に勝てるわけもなく。ずるずると布団が動きはじめました。

これは、まずいです。

非常に旗色が悪いと言えます。

ならば、私に取れる作戦はただひとつ。和也君の弱い部分を攻める他ありません。

「わかりました……観念します」

しおらしい声を作り。私は布団を掴む手を開きました。

「お、おお。そうやって最初から素直にすりゃいいんだよ」

「制服に着替えるので。部屋の外で待っててくれませんか？」

「いや、それは駄目だ。お前ぜってーそのまま逃げるだろ」

む。なかなか鋭いですね。さすが和也君です。

蒔名という女を知り尽くしています。

少し緊張で早くなる鼓動を抑えながら。私は勤めて平静に、それでいて可愛らしい笑顔を作り、首を横に振ります。

「そんな事するはずないじゃないですか。今日は久しぶりに学校に行ってもいいかな？っていう気分なのですよ」

「胡散臭え……」

「そ、それにですよ？和也君。私は眠る時はブラジャーをしていません」

「お、おう」

僅かに、和也君の顔が赤くなり。心なしか視線が私の胸元に向いている気がしないでもありません。

ちょっと気恥ずかしいですが。今日も学校を休むという大きな目標のためには。そこはとりあえず流す事にします。

「今、和也君の見ている前で着替えてしまったのでは。私は胸を晒さなくてははいけません。ぽろり状態になってしまうのです。それにパンツも見えてしまうでしょう。いくら10年来の幼馴染とはいえ。そこまでサービスするのはいかなものかと思うのですが」

「そりゃあ、まあ。蒔名も……女の子だもんな」

「そうですよ。私にも恥じらいというものがあります。そこは和也君が譲歩して、速やかに部屋を出るべきではないでしょうか？」

きっと、今の和也君の頭の中は。お猿さん状態になっている事でしょう。

自慢ではありませんが。私の胸は母譲りのなかなか立派なものです。

そして、和也君が胸の大きな女の子が好きなのも知っています。

助平の極みです。

「そうだな。わかった……着替え終わったら声をかけてくれ」

私の腕を掴む力を緩め。幾ばくかの疑念の眼差しを私に向けながらも、和也君は大人しく部屋を出て行きました。

チャンス到来。一気に形勢を逆転するこの千載一遇の機を逃す手はありません。

私は勢い良く立ち上がり。素早くドアを閉めると、鍵をきつく閉め。乱れた布団をもう一度綺麗に敷きなおしました。

「とあっ」

布団に飛び込み。ごろんごろんと転がりながら、私はこみ上げる笑いを噛み殺します。

「和也君もまだまだ甘いですね。女の子に苦労するタイプに違い無いです」
ごろごろ。ごろごろ。

しばしの間。再び温度を取り戻しはじめた布団の感触を確かめ。続いて、肩まですっぽりとか
け布団を被り。私は再び目を閉じました。

これで、すべて元通りです。野蛮な侵略者を退け、私だけの世界が再び戻ってきました。ひ
んやりとした冬の尖った気温。ぬくぬくなお布団。パソコンのファンが回る音と、ハードディス
クが処理を刻むカリカリとした小気味良いリズム。

すべてが完全に完成された世界です。

さて、これでお昼まで私の睡眠を邪魔するものはありません。安心して眠るとしましょう。「おい、詩名！まだか？そろそろ行かないと俺も遅刻しちまうんだけど」

どんどんどん。

乱暴にドアが何度も叩かれ。私はすぐに目を開く事になりました。

早くも忘れていました。

ドアの外に和也君を待たせたままです。

うるさいです。

「おやすみなさい……和也君」

私は小さく呟き、顔の半分まで布団を被ります。

「くっそ。またかよ、俺はまた騙されたのか？くっそ！卑怯だぞ、詩名」

知った事ではありません。騙される和也君が悪いのです。

いつも私のおっぱいばかりを見ているバチが当たったのです。

「明日こそ、明日こそ学校に連れて行くからな。覚悟しとけよ」

そんな、和也君の負け犬の遠吠えのような。捨て台詞を薄れる意識の中で、なんだか朧気に聞きながら。そのまま、睡魔の奔流に意識を任せて深い眠りに落ちていきました。

心と体が乖離していく中で、私はひっそりと。こっそりと祈るのです。

ああ、願わくば。

今日も昨日と同じく、私の愛するこの六畳一間の小さな世界が、平和でありますように。

○

再び目を覚ました頃には、すっかりお昼を過ぎていました。

今度は眠りすぎてしまったのか、体全体になんともいえない鈍重な倦怠感がのしかかっていた。

とはいえ、私はこのまま明け方まで起きているので、これでも眠りすぎという事はありません

。

眠れるだけ眠り、起きれるだけ起きる。そんな不摂生なサイクルが、この三年間の引き籠もり生活ですっかり完成されてしまったのです。

私は部屋の鍵を解除し、ドアを三分の一ほど開きます。すると、お盆に綺麗に載せられ、ラップをかけた昼食兼朝食が床に置いてありました。

お箸の隣には、小さなメモ帳に「お仕事行ってきます。食べ終わった食器は廊下に出しておいてくださいね」と可愛らしく丸い母の字で書かれていました。

「ご、ごっつぁんです」

神妙な気分でお盆に載った昼食兼朝食一式を部屋に招きいれると、私はスリープ状態になっているパソコンを復帰させ、その前に鎮座しました。

管理者不在の中、チャットルームは四人ほどの来訪者で和気藹々と会話が交わされていました

。

朝に見かけた二人と、新たに加わった二人。そのうち一人はいつも来てくれる常連さんです。

「そろそろ、参加してみましようか……」

暇ですし。

もふもふと母特製のだし巻き卵を頬張り、私はキーボードに当たり障りの無い挨拶を打ち込み、エンターキーを押しました。

makina【RM】:お、おはようございます。新規さんははじめましてです。

silkさんtoppyさんWwwさんHifiさんが書き込んでいます……

silk:あ、ルームマスターさんだ。

toppy:昨夜はどうもーw

Www:あ、はじめまして。お邪魔してますー。

Hifi:ちわっす。

連なって挨拶が帰ってきました。

makina【RM】:雑談部屋なので、みなさんゆっくりしてってください。

Hifi: makinaは相変わらず不健康そうなサイクルで生きてるなあ……。

ネット上だけの付き合いとはいえ、かれこれ二年近くの付き合いになる、Hifiさんはさすがに私に対して慣れた対応で返してきます。

Www:ちゃんと寝たほうがいいっすよ。健康にも悪いし。

新規さんのWwwさんは、私の体調を心配してくれてるようです。しかし、あえて書き込みませんが、みなさんこんな時間に自由に個人の管理する地下チャットを見つけて入室してきているのですから、それなりに不健康なのでは？と思ってしまいます。

ルームメンバーの中で、自己申告ではあるものの、職業がわかっているのは。デザイナーのsilkさん。個人経営の小さな会社の社長だというtoppyさん。Hifiさんは音楽関係の仕事だということまでは把握しています。

私は単なる引き籠もりの女子高生なのですが、別に隠す必要も、塗り固めなければいけないプライドもないので、ありのままの事実を伝えてあります。

新規のWwwさんの素性はよくわかりませんが。ネットとは本来匿名性の有利さがあってしかるべきなので。相手が話してくれるか、誰か他の人が聞かない限りは、私は自分から聞かないようにしています。

Www:さっきまで、みんなでコロツケーキの話しをしてたんですよ。makinaさんは食べた事ありますか？コロツケーキ。

makina【RM】:??

コロツケーキ。一体なんの事でしょう？私がこれまで生きてきて初めて聞く言葉です。

makina【RM】:何か流行りものでしょうか？私は殆んど外に出ないので、よくわかりません。

Hifi: makinaは筋金入りの引き籠もりだからな。ネットのニュースサイト以外の情報は皆無なんだよ。

さらりと、Hifiさんが失礼な事を言いますが、事実その通りなので反論の余地はなく。私は遺憾ながら、その不名誉を受け入れる事にします。

とは言っても、このままでは話の流れについていけないので、チャットウィンドの隣に新規で窓を立ち上げ、PALを立ち上げます。

PALというのは、パーソナル・オール・ライブラリィの略で。ネット上に溢れる単語を自動

的に拾ってきて、項目を作りニュース記事やブログなどから辞典のように情報をペーストして記事にしてくれる優れもののできる子なのです。

難点は無作為に関連する記事を選んで貼り付けてくるので、情報の精度が非常に不確かで最終的にはその情報が正しいかどうかは人間の目で判断しなければいけないというところなのですが.....。

ぱっと、耳にした単語の意味を大まかに理解するぐらいならP A Lは脅威の情報収集能力を発揮してくれます。

さっそく、コロツケーキとやらをP A Lの検索にかけてみます。

P A Lの巡回時間はおよそ2秒。関連記事を扱っているサイトは1500000件ほどでした。

な、なかなか認知されているようですね。

そこから適当に、信頼できそうな情報元を辿りコロツケーキの詳細を探ります。